

AWAKE 伊藤

Ito Hiroshi Abe Kanta

ホームレスにスポットが向く時のほとんどは、
その人がホームレスになった経緯や、生活の実態の部分だけだ。

ただその根幹にあるのは何か刺激がありそうという好奇心のみで、
そこに人と人の真っ当なコミュニケーションは存在していないと思う。

私自身もホームレスの生活について調査を始めた当初は、
自分の生活とは異なる部分を見つけるとそこに興味を持ったが、
次第にそれはただ彼らが生きていくために当たり前に必要なことであって、
それ以上でもそれ以下でもない気がした。

それよりも私の心が動いたのはその人の表情や佇まい、言動など、
ホームレスとはもはや関係のない「その人らしさ」を感じられた瞬間だった。

家がなくても生活がある。
生活の形は人それぞれ違うが、
その中には必ずその人らしい瞬間がある。

社会で生きる我々にとって
この「その人らしさ」というのが
お互いを尊重し合うために重要なものであるのだと思う。

10 月

—

私がホームレスの研究を始めたのが2025年の7月で、伊藤さんに初めて会ったのもその頃だった。研究が進んでいくにつれ、「炊き出しや野宿などのホームレス特有の時間よりも、むしろ私たちとなんら変わらない平凡な時間にこそ、その人らしさが浮き出るのではないか。人を撮るならそういう瞬間の写真を撮りたい」と思い、その考えをそのまま伊藤さんに伝えて、この10月から彼にフォーカスして撮影をはじめた。

10月22日は伊藤さんの誕生日だ。前日の21日に彼と会う予定だったのでプレゼントを持っていたものの場所へ向かったが彼はいなかった。代わりに彼の荷物置き場所に置き手紙があった。「本日急用に付きお会いできなくなり申し訳ありません」。その手紙の側にはどんぐりと松ぼっくりが添えられている。絵本の世界のようなこの伝達手段に私は胸を打たれつつ「一週間後にまた伺います」とだけ書き残した。一週間後、無事に伊藤さんにプレゼントを渡すことができた。その日の夜は伊藤さんとその友達と私の三人で乾杯した。伊藤さんは74歳になった。

11 月

—

私たちは毎週火曜日の 12 時に新宿駅東口付近の広場で待ち合わせをすることにした。11 月は都内の紅葉スポットをたくさん練り歩いた。新宿御苑や明治神宮外苑の銀杏並木などの名所の他に、あまり知られていないような隠れ紅葉スポットへも連れて行ってくれた。さすがに街をよく知っている。

伊藤さんは植物に詳しい。一緒に歩いていると、あの木の名前はなんだとか、ここには小さいブドウが実るとかそういうことを話す。栃の実に絵を描いたものを私にくれたこともある。そういう穏やかな遊び心は伊藤さんらしさの一つだと感じる。また、地理・歴史が好きで長岡のことや私の地元山形のことにについてもよく知っていた。というのも、若い頃は登山が好きで全国の山々を登って周ったらしい。その時の名残を感じさせる足腰の強靱さで、御年 74 歳にして今も私よりも歩くのが速い時がある。小便のために一緒にトイレまで走ったこともあった。その時も私より少し速かった気がする。

12月

—

正午に待ち合わせ場所の広場で集合し、まずはコンビニで缶ビールとホットフードを買う。広場に戻って、この一週間のうちに起こったことなどをお互いに話しながら昼食をとる。1時間ほど経ったら、上野の銭湯へ行き、その後少し散歩してから夕方ごろに居酒屋かコンビニで乾杯する。これが私たちの毎週のルーティーンだった。そしてその時のお金はいつも伊藤さんが出してくれた。いつも私は有り難くご馳走になった。

ある時、銭湯から出た後まだ少し時間があつたので上野動物園へ行くことにした。この時から私は伊藤さんにたまにカメラを渡して好きなように撮ってもらったりしていた。私が「動物園行きましょうよ」と言った時は「子供が行くイメージだからなあ」と苦笑していたが実際に行ってみると、トラが伊藤さんの目の前に座ってあくびをするので伊藤さんは興奮してトラの名前を呼んだりしていた。私が「伊藤さん、めっちゃテンション上がってるじゃないですか」と言うと、彼は颯爽と次のゴリラがいる森へ向かっていった。

1 月

—

年明けは1月6日に書き初めをする予定を立てた。待ち合わせ場所に先にいた伊藤さんはマスクをしていたので聞いてみると、どうやらお正月に体調を崩してしまったようだ。それでも書き初めには付き合ってくれた。私たちは代々木公園内のベンチテーブルで日の光に照らされながら書をしたためた。紙の下には新聞紙とレジャーシートを敷いて四隅をビール缶で押さえたユニークな書き初め大会がはじまった。

伊藤さんが筆を持つ。いったいどんな言葉を選ぶのだろうと私はその筆先を見つめる。伊藤さんは一気に書き上げ、筆を置いた。「盛龍金龍」...。私は見たことない熟語で意味は分からなかったが、なんかすごく縁起が良さそうだった。そしてとても達筆な「盛龍金龍」だった。伊藤さん曰く、こんな四字熟語は存在しないらしい。ただ縁起が良くて筆が映える字を選んだという。74歳の書き初めはそういう世界なんだと分からされた瞬間だった。その後はお互いに「ここのはらいが難しいね」などの反省会をほどほどにし、私たちの書き初め大会は幕を閉じた。